

あとがき

本書刊行に向けて第一歩を踏み出したのは、平成一〇年（一九九八）二月のことであった。それは我が大阪教育大学日本文学第一ゼミ（通称、小野ゼミ）の歴史で言えば、七期生が卒業を間近に控えた時期であった。思い返せば小野ゼミ七期生は、日本・アジア言語文化コースの学生四名に、教員養成課程国語教育専攻から二名の学生を迎え入れた大所帯で賑やかな学年であった。この学年が四回生の秋に、ゼミとしては空前絶後となる学園祭参加を果たしたことはゼミ史に残る大事件で、今でも後輩ゼミ生の間で語り草となっている。学園祭ではお茶漬け屋を展開し、二万円余のゼミ費を稼ぎ出した。これはもともと追い出しコンパの資金を稼ぎ出すための窮余の一策であったが、七期生ならではの団結力を発揮した見せ場でもあった。今では楽しく充実した思い出として、当時のゼミ生ひとりひとりの心の中に残っていることであろう。

また、七期生が三回生であった秋（平成八年一〇月）には、日本歌謡学会の秋季全国大会の会場校を担当した。七期生は先輩の六期生とともに大きな働きをし、学会は大成を取めることもできた。私はゼミ担当教官として、この七期生に大きな期待を抱いていたが、彼女たちはひとつひとつの課題を着実にこなし、見事に期待に答えてくれた。

そんな七期生たちが卒業を間近にして、たつたひとつ私に訴えたことがあった。それは自分たちがこのまま卒業したのでは、小野ゼミに在籍していたという確固とした足跡を残せていないという訴えであった。実は、七期生たちがそのように言い出したにはある経緯が存在した。小野ゼミでは四期から六期に至る学生たちが一冊の本の刊行に大きな役割を果たしていた。その本とは『隆達節歌謡』全歌集 本文と総索引（笠間書院刊／以下、前著と呼ぶ）と題する一書であった。その刊行に至る経緯については前著の「あとがき」の中で詳しく記したので、ここでは簡単に紹介するに留めたい。

前著『隆達節歌謡』全歌集 本文と総索引」は、四期生がゼミに入ってしまった後、平成六年二月に「隆達節歌謡」本文をもとに索引作り作業を開始し、五期生・六期生の助力で作業を進め、そして七期生がゼミに入ってきた時点（平成八年二月、現在は六月に所属ゼミが決定するが、当時は毎年一月二月決定であった）では、原稿は一応の完成をみていた。そしてその後、編者である私が細部の点検を重ねて、遂に平成一〇年二月に刊行した。前著はささやかな書ではあったものの、その刊行は小野ゼミにとっては大きな企画で、ゼミ生の結束に大きな力となった。

後輩に当たる七期生たちは、先輩たちが携わった作業の話や常々耳にしていた。そして、卒業を間近にして遂にその書の刊行を直接見るようになったのである。彼女たちにしてみれば、自分たちには先輩たちと同じような成果や思い出が得られなかったという思いを強くしていたわけである。

この訴えを聞いた私は、すぐさま学生たちにひとつの提案をした。それは以前から温めていた別の索引作りに関する提案であった。江戸時代には多くの流行歌謡が興亡を繰り返した。しかし、それらの歌謡を検索することは容易ではない。和歌には古く『国歌大観』、今日では『新編国歌大観』が備わっているが、歌謡にも同様の索引が必要であると痛感していたのである。幸い江戸期の流行歌謡には7・7・7・5という四句の音数律を持つ定型の歌謡が多い。したがって、それぞれを一句として、『国歌大観』のような各句索引を作成できればと考えていた、まさにその折であった。私は早速学生たちにこの提案をした。

この話を聞いた七期生たちはおおいに喜び、後輩の八期生たちとともに早速作業に入った。平成一〇年二月上旬のことであった。といっても、すぐに卒業していく七期生たちに残された時間は僅かであった。そこで、まず編者小野が選定した流行歌謡本文を句ごとに区切り、カードに書き出していく作業から始めたのである。作業は常に編者が責任をもって進め、学生たちは編者のチェックを受けながら作業を行うことを旨とした。したがって、言うまでもないことだが、本書の全責任は私小野にある。

ところで、作業は原則として、各年度の学期の合間である七・八月、二月、二月に数日ずつ行うことにしていたので、

一年でもそうそうは進捗しない。その地道な作業が八期生・九期生・一〇期生・一一期生・一二期生と引き継がれるうちに、いつしかカードは完成し、それを五十音順に配列し、原稿用紙に清書するといった段階に進んで行った。

この間、平成一〇年度から一三年度までの四年間にわたり、「江戸期流行歌謡資料の基礎的研究」と題する課題で、日本学術振興会（当初は文部省）科学研究費補助金（基盤研究C）の支給をいただいたことは誠にありがたいことであつた。そのお蔭で物心両面から索引作成の作業にはずみをつけることができた。

そして、昨年度中には笠間書院のご理解を賜つて出版が現実化するとともに、原稿も完成した。さらに本年度に入ると、日本学術振興会から出版助成金もいただけることが決定し、遂にここに至つたのである。

現在、小野ゼミには一二期生と一三期生が在籍している。六月末にゼミに入つた一三期生は索引作りには直接に携わらなかつたが、校正作業で大きく貢献した。

以上のように、本書の原稿完成に至るまでには約四年（刊行までは約五年）の歳月と、左記三五名のゼミ生たちの献身的な労力を費やした。各期ごとに五十音順に名前を列挙して、感謝の意を表したい。

〔第七期生〕 井上智絵、岡嶋豊子、沖藤陽子、阪本太郎、武生京子、長田栄

〔第八期生〕 西貴史、松尾譲児

〔第九期生〕 衣奈由加里、安田拓志

〔第一〇期生〕 川口裕士、田辺舞子、原田寛子、福島朝美、藤本賢、森内恵美、米田美有紀

〔第一一期生〕 幸山佳代、高橋雄一、竹本友一、堤淳子、西田涼子、野崎美保、橋本安希子、藤原美智

〔第一二期生〕 三溝雄介、高嶋藍、田丸藍子、壺田由美、土井くみ子

〔第一三期生〕 木本絢子、四野智子、首藤育美、長山悟子、山村真穂

なお、これらの学生のうち、阪本（七期生）・松尾（八期生）・安田（九期生）の三名は学部卒業後も大学院生などとしてゼミに残り、特に大きな貢献を果たしたことをここに記しておきたい。

本書も前著と同様にまことにささやかな書と言うべきで、譬えてみれば風車に挑んでみせるドン・キホーテのような、小さなゼミの足掻きそのものに映るであらう。しかし、私にとってはゼミ生たちと出逢い、ともにひとつの目標に向かつて、世紀を越えて走り続けてきた、かけがえのない記録である。改めて教員として幸福な時を過ごさせてくれた歴代ゼミ生たちに心から感謝の気持ちを伝えたい。

前述させていただいたように、本書は平成一〇年度から一三年度にかけて交付された日本学術振興会（当初は文部省）科学研究費補助金（基盤研究C）「江戸期流行歌謡資料の基礎的研究」の成果を踏まえている。この間、江戸期の未紹介歌謡資料の調査及び位置付けを中心に研究を続けてきたが、最終的には二つの大きなゴールを想定していた。ひとつは江戸期歌謡資料の調査成果をまとめた学術書の刊行であり、もうひとつは多方面の方々に便宜を図ることのできる索引の編集刊行であった。ひとつ目の学術書については、平成一一年度に日本学術振興会から科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受け、同年一〇月に『近世歌謡の諸相と環境』と題して笠間書院から刊行させていただくことができ、ゴール到達を果たした。

そして今回、幸運にも再び同じ研究成果公開促進費を賜ることになり、いよいよ二つ目のゴールに到達することができることとなった。関係各位に対しては誠に感謝の気持ちにたえない。本文編の作成にあたっては、國學院高等学校・駒沢大学附属図書館・国立国会図書館のお世話になった。御礼申し上げたい。また、いつも懇切に相談に乗ってくださり、編者のわがままを聞いてくださる笠間書院社主池田つや子氏、編集部大久保康雄氏にも心より御礼を申し上げます。

平成一四年九月

小野恭靖